

1. 「心で見ること・考えること」

2. 「私らしく、自分らしく」

身の回りで、気が付けば「あれ？」と思うことって多くないですか？

- ・妻を「奥さん」、夫を「主人」と呼ぶ。
- ・男性（夫）は働いていれば、家事はしなくてもいい。
- ・子育てや日常の近所づきあいは、女性（妻）にまかせきりである。
- ・ドラマなどで「男性は仕事、女性は家事育児」という性別役割分業が普通のように演じられている。
- ・テレビ番組の司会は、男性がメインで女性がサブである。
- ・「女らしいやさしさ」「女性特有の感情」「男らしい決断」「男ならではの実行力」などの表現。
- ・女性の場合だけ「女性～」「女～」「女流～」「女社長」「女医」とつける。
- ・自治（町内）会長は、必ず男性である。
- ・会合では、女性が湯茶の準備や後片付けをし、男性だけで話し合っている。
- ・男性は上座で、女性は下座である。
- ・子ども会などで出す記念品や賞品が、女の子用がピンク、男の子用がブルーなど、区別されている。
- ・女性や女の子が参加できないお祭りがある。

極端な例えだと思える人も多いかもしれないけど、その根っこの部分にぜひ注目してもらいたい。「自分」として何かを我慢したり、強制されたり、また逆に強要したり、当たり前と思っていたり…。限りなく存在する「あれ？」をいっしょに考えてみませんか？気が付きにくいけど、心に感じるものもたくさんあります。「あれ？」を考えることで自分を見つめなおすよいきっかけになります。

「あれ？」に反応できる心を持つことも大切になってきました。反応したら考えませんか？男も女も子供も年輩の方も…。ここにも「あれ？」がありますよ。

3. 「桂七福・落語的ジェンダー学」

4. 「ほんの少し、ジェンダーの中へ」

ジェンダーとは、社会的・文化的性差や、女らしさ・男らしさのこと。

ジェンダーにしばられて人間らしく、自分らしく生きられないとしたら、それはとても不幸なことではありませんか。ですから、ジェンダー・フリーは『人権問題』なのです。

これまで、こうした性差別や女らしさ・男らしさは、生まれながらのものであると思われていましたが、これらはむしろ社会的・文化的につくられたものなんです。そこで、「女性と男性は、生まれながらに性質が異なる」という考え方（性別特性論）をやめようと、ジェンダーということばが使われるようになりました。ジェンダーは、私たちの意識や生活の中にとけ込んでいて、気づきにくいものです。ですから、私たちは、知らず知らずのうちに、ジェンダーにしばられたものの見方や、言動をしています（ジェンダー・バイアス）。ジェンダー・フリーな社会をめざすために、私たちの意識や生活のなかに組み込まれているジェンダーに敏感に気づいて、なくしていく必要があります（ジェンダー・センシティブ）。

古典落語の中の1場面や、現代の中のジェンダーを小噺のように紹介しながら、私たちの意識や生活の中に、巧妙にかくされているジェンダーを見つけだす第一歩のお手伝いをしたいと思います。